

## 「地図を通してみる「高松」の400年」を開催しました。

平成29年3月12日（日）、香川大学名誉教授の武重雅文氏を講師に迎え、講座を開催しました。

いつも通り慣れた道を歩いていて、ふと空き地があることに気が付いても、そこに、これまであったはずのものが思い出せないということは、ほとんどの人が体験しているのではないのでしょうか。ところが、長い期間を経て同じ場所を見ると、かなり街の様子が変わっており、その変化に気付かされます。



今回の講座では、現在の高松の原型が姿を現わす高松の城下町形成以降の江戸時代初期・中期・後期の、ほぼ100年ごとの地図や昭和3年の地図等を見比べ、城下の形態と発展の変遷とともに、400年余りの「高松」の町の景観がどのように変化しているかにスポットを当て、歴史景観の意義の重要性等について、講師から御説明いただいた後、古地図を持ってまち歩きをし、その変容を実際に受講者に体験していただくこととしました。

まず、講師からは、冒頭、私たちが何気なく目にしている「高松」の地名や町の名前などの由来について、江戸時代の地図や絵図を用いて、分かりやすく解説していただき、現在でも、江戸時代から続く通りや、町がたくさんあることを御説明いただきました。講師によれば、江戸時代初期の地図から、城下町としての境界は西端が現在の錦町、南端が現在の古馬場町、東端が塩屋町周辺であったと推測され、現在の丸亀町の南口（国道11号）から生涯学習センター（まなびCAN）がある片原町、兵庫町に至る町名のほとんどは往時を偲ばせるものだという御説明がありました。

その後、生涯学習センターを後にして、享保年間（1716～36年）作成の『高松城下図』、『完成期の高松城下町図』等の古地図を片手に、下図のとおり、現地で講師の詳細な解説を交えながら、江戸時代の高松城の外堀周辺などをまち歩き（散策）しました。現地では、受講者が各々、往時がどうであったかなどの講師の話に熱心に耳を傾け、質問をしている姿が大変印象的でした。

